



リーダーズインタビュー
クアルコムジャパン 特別顧問 山田純氏
Redesign of Society 2014
TED x UTokyo 2015

■ GCL リーダーズインタビュー 山田純氏

研究、ビジネス、さまざまな分野のリーダーたちへのインタビュー連載、「リーダーズインタビュー」。3回目となる今回は、モバイル通信端末に関する数々の技術を有するクアルコムジャパン、その特別顧問である山田純氏へのインタビューです。



—東京大学工学部を卒業後、すぐに就職されていますね。

当時から、理科系の学生は大学院に進学することが多かったのですが、私自身は早く社会に出たいという気持ちが高まっていました。1978年卒業で、時は高度成長時代。新しいものがどんどん出てきていた時代です。

電子工学科で移動通信の研究室にいましたので、松下通信工業(現・パナソニック モバイルコミュニケーションズ)に入社を決め、一つの通信回線を多重に利用しようという、当時の花形技術に取り組みました。

当時の通信産業というのは、NTT(当時の電電公社)が技術開発のロードマップを持っていて、メーカーはその仕様に合うように作るという仕事が大半でした。「言われたままに作っているだけで良いのか」——そう迷っていた80年代前半に、モトローラが小型の携

帯を市場に出したのです。あれを見せられたときの「自分の仕事はなくなった」という衝撃を、いまでも鮮明に覚えています。

しかし、技術開発に目標があるというのは強いもので、後追いでこそありましたが、日本の技術は成長し、成功体験を重ねました。当時は「アメリカの通信システムに追いつく」という明確な目標がありましたが、今は誰も目標を示してくれない時代になっていますね。

—その後、起業などを体験されました。

1990年頃、アメリカの携帯電話マーケットが大きくなったため、アメリカのパナソニックの社員が松下通信工業に市場への参入を提案してきました。少し手が空いていたため、「担当してみたい」と申し出たのです。当時、私には温めていたアイデアがありました。

同じ電話番号で、外では携帯電話、ビル内ではコードレス電話として使えるという、一台で二役の携帯電話を作れないかと考えていたのです。日本では、NTTのロードマップに載っていないシステムは作れないため、アメリカで提案することにしました。

アメリカでは、いろいろなメーカーが新しい方式を提案し、良いものが業界の標準になるという、「デファクトスタンダード方式」が一般的です。私の提案した方式も無事に商業化され、通信事業者から「一緒に標準化しよう」という提案にも恵まれました。

しかし、日本に戻ると、また仕事がNTTの下請けになります。一度アメリカでの自由闊達なスタイルを味わってしまうと、これでは満足できません。そこで、数カ月後に会社を辞めました。

仲間になったアメリカ人がアメリカで「ワンナンバーサービス」を掲げる会社を立ち上げ、わたしが日本にその技術を持ってきました。これが1995年のことになります。

残念ながら、3年後の1998年には事業撤退を決めました。いま考えれば「なぜ失敗したのか」は分かるのですが、当時は自分の考えに酔いしれていましたね。そもそも「市場を見る」という概念が欠落していて、技術的なアドバンテージにのみ惹かれていたのです。

—そこから、クアルコムジャパンに転身されます。

ハローワークで職探しをしていた頃、知人の伝手で「クアルコムが日本に進出する」という話に巡り会いました。当時、通信業界で名前が通り始めていた会社です。

しかし、それは悪名でもありました。「IPR(知的財産権)で高額を取っていく」というものです。ですので、最初はアルバイトとして入社し、「本当にえげつない会社だったら履歴書に書かなくて良いうちに辞めよう」と考えていました。実際には真摯な会社で、真面目に技術開発をしている会社だと分かったので、1年後には正社員になりました。

日本でも、クアルコムの技術をうまく使った会社と、クアルコムに警戒心をもった会社とがありました。前者の方が業績は伸びましたね。

どの様にうまく人と組んで、良い所を徹底的に利用するか——ある意味で強かな、あるいは柔軟な態度というのがビジネスでは重要です。最近はおそらく韓国や中国、台湾などのアジアの会社がやっていることだと思います。日本の企業は自社技術へのこだわりが強過ぎます。

勘違いしないでほしいのは、「こだわりが強い」とは悪い面ばかりではないということです。韓国や中国、台湾の企業は「スマートフォンを作って売る」という目標が明確です。一方、日本はそのレースに同じ土俵で戦うのではなく、まだ見えていない新しい市場をどのように作るのかを考えるべきステージに来ています。

確かに、日本の情報通信産業は落ち目のように見えていますが、私は悲観していません。独自の技術開発に徹底的にこだわるのは、新たな市場の開拓を考える上では良いことなのです。

クアルコムの本社から役員や社員が日本に来るのも、日本で新しいアイデアを持っている人を探すためです。彼らは「日本はミステリアス」だと言います。これは大学も含めてのことで、見た瞬間には開発の意図が分からないようなまったく新しいものに、時間を掛けて取り組んでいるからだと思います。海外のハイテク企業からから見て、日本の良さの見直しは急速に進んでいます。例えば、ナノテクノロジーやマテリアルなどには日本発のものが多く、飛行機などに関しても根元の素材まで遡っていくと日本に行き着く、という面にもっとハイライトを当てても良いと思います。

—クアルコムジャパンの社長を務められましたが、リーダーシップについてはどのようにお考えですか？

あまり意識したことはないですね。個人個人が、自分が一番納得できることをやれば良いと考えています。自分として何がしたいか、何かエキサイトできることを持つのが全ての源泉ですね。

「リーダーシップ」という言葉はよく使われるものですが、ピンと来ません。リーダーと言われる人は、リーダーシップを意識しているのでしょうか？ リーダーは自分が一番燃えることをやっているだけ、そして周りの人のやりたいことを止めない人ではないかと思っています。

—東大生、特に技術に関心を持っている学生へのメッセージをお願いします。

できるだけ質問をしたら良いと思います。難しいことを考える必要はなく、おうむ返しに「Why」と尋ねる。「それはどうしてですか」と訊けば良いだけです。

(取材：森友亮、荒川拓 構成：森友亮)
(※本企画は、東京大学新聞との共同企画です)

Redesign of Society 参加報告

2014年9月9日～28日、GCLコースのM1学生7名がフィンランドに渡航し、アールト大学のAalto ARTS Media Labで行われた集中コース「Redesign of Society (社会のリデザイン)」に参加しました。

Aalto ARTS Media Labはヨーロッパにおけるデザイン学の有力拠点で、この集中コースはGCL生の受け入れを前提とした企画として開催されたものです。参加した学生の報告を抜粋・編集して掲載します。

●伊東謙介さん (学際情報学府・M1)

我々が通ったAalto Universityはフィンランドの南端ヘルシンキの海沿いにあり、バス通学の際にはいくつかの小島を横断しなければならなかった。フィンランドの9月は丁度日本の10月後半から11月に近い。寒い朝の通学は若干大変であったが、澄んだ空気と美しい紅葉が成す落ち着いた雰囲気は渡航前に私がイメージしていたフィンランドの(ムーミンの)世界観以上の美しさだった。

プログラムは主にメインのキャンパスで行われた。Aalto大学はフィンランドの著名な建築家兼デザイナーの名前が由来であり、いくつかの建物はAaltoによるものである。それ以外の建物も彼の作品と色調を合わせた赤レンガ造りのものに統一されており、森の緑と海の青に赤が映える美しいキャンパスであった。

プログラムに参加した生徒が、年齢も国籍も非常に多様であった点が印象的だ。ヘルシンキという町全体が私の想像よりはるかに国際化しており、海外経験の浅い自分にとっては非常に新鮮であった。

ヘルシンキは東京と比べれば規模も小さく人も少ないが治安はトップクラスであり、遅くまで飲み続け深夜に帰宅することが何度かあったものの危険や不安を

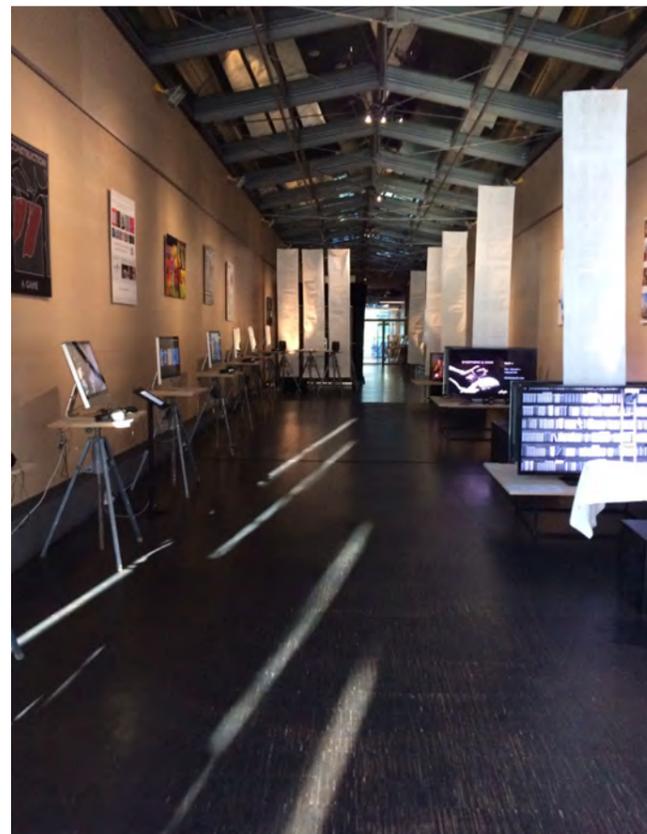
感じたことは全くなかった。

公共交通機関の時間が正確であり、バスや路面電車が専用カードでスムーズに乗り換え出来るため不便を感じることはほとんど無かったが、渡航中に一度ストライキがあり全ての路面電車がストップしたことは新鮮であった。また事前に知ってはいたものの、市内で働く全ての人が英語が堪能である点には驚かされ、フィンランドの教育水準の高さを痛感した。

プログラムの最終成果発表と学内Media Lab創立20周年記念パーティーはキャンパスとは離れた場所にあるAalto Media Factoryにて行われた。商用ビルと一体化したこの施設は決して広くは無いものの、3Dプリンター等の最新の設備と美しいインテリアに囲まれており、さながらIT企業のオフィスであった。当初そのこだわり様に困惑したほどであったが、テクノロジーとアートに注力するAalto大学ならではの施設と言えるだろう。

このようにMedia Factoryでの一連のイベントは私にとって特に目新しく貴重なものであった。

恐らく国内にはこのような文化を持つ大学は、総合大学、美術大学、技術系の大学全てを含めてもほとんど存在しないだろう。



(左) アールト大学の建物は赤レンガ造りに統一されている。(上) 3D最新の設備と美しいインテリアに囲まれたAalto Media Factoryは、さながらIT企業のオフィス。(写真提供：伊東さん)



現代社会において起きた問題点を書き出し、ホワイトボードに貼る。この後はテーマによりグループを分けた。(写真提供：詹さん)

●詹翊加さん (学際情報学府・M1)

大体午前中はゲストの講義で、午後からグループワークでした。午前のスピーチはそれぞれのテーマがあって、例えば法律と著作権、環境保護、テクノロジーと未来などです。午後のグループワークでは最終報告を除き、四つくらいの発表があって、それぞれ2040年の未来生活想像、現今社会において起きた問題点のまとめ、ディストピアの社会などでした。

オープニングとして、2040年の社会を想像して発表するグループワークを行いました。私のチームでは、未来の生活は、ロボットが現状よりもっと皆の生活を支えるだろうと考えました。他のチームの発表では哲学的なものもあり、想像が難しいような社会もありました。

今回の授業で一番好きな部分は、やはり午後のディスカッションの部分でした。クラスメイトは皆がそれぞれ違う背景を持っていて、特にアジアと欧米人の考え方は違うと何回も思ったからです。この困難の上で、頑張って自分の意見を出さなければならないし、相手が納得するまで説明しないといけないので、ディスカッションはすごく挑戦的なものでした。

今回のインターンシップでAalto大学の学生たちと友達になって、いつも昼ご飯を一緒に食べていました。昼ご飯の時間では国や文化の違い、または午前中の授業に対して自分の感想を話して、交流しながらもたまに発言にびっくりすることもありました。



もう一件、特に話したいのが、授業の雰囲気のことです。アジアでは授業の時に先生の話に集中して聞いて、きちんと座らなければならないし、授業の途中でも発言や質問する人が少ないです。それに対して、今回の授業では学生たちはレッスンでのんびり出来るし、眠くなったら立って教室内を回ることも構いません、ある学生さんも授業を受けながらセーターを作っていました。自由な環境で、学生はまじめではないと思われるけど、実はちゃんと質問をするし、先生との議論をしていました。

●連テイテイさん (学際情報学府・M1) (日記形式の報告のため、一部の日付を抜粋)

9月11日 午前中はJack Whalen先生から民主運動、そして漁業についてのレクチャーでした。ランチは食堂で済ませて、午後いくつかの主題を設定し、グループごとに自由に議論を行いました。私は「権力の源泉とレイヤーから見る政治の行方」のチームに参加しました。一番印象深いのは、フィンランド人の学生が自分の意見に執念を持っていて、簡単に他人の意見に影響されないことです。夜はイタリアンのファミレスで夕飯を食べました。

9月24日 グループによって朝の集合時間が異なるため、みなさんは各自にToolo Towerから出発し、いつもと違う方向でアールト大学のアラビアキャンパスに向かいました。最終発表に向けて13時まで各グループは、スライド案やポスターの準備などをやり続けていました。アラビアキャンパスの食堂は図書館とつながっていて、透明性が高く心地よい空間でした。そこでランチを食べて、午後一時から最終発表が始まりました。五つのグループは、それぞれ「freedom」「commons」「employment」「transparency」「redesign criteria」の視点から、様々な手法を用いてUtopiaコンセプトを説明しました。大胆で斬新なアイデアばかりで印象深かったです。



参加したコース生が捉えた、興味深く感じられた光景(写真提供：(左) 菊池智矢さん、(上) 山口揚平さん)

TED x UTokyo 2015 開催

2015年1月10日、東京大学本郷キャンパス工学部2号館にて、「TEDxUTokyo 2015」が開催された。

TEDは「Technology, Entertainment, Design」の略で、米カリフォルニア州で年に一度、様々な分野から出演者を招きトークを行うコミュニティイベントである。1984年に始まったTEDは、「Idea Worth Spreading」のコンセプトのもと活動を続け、2006年のオンライン配信により全世界に広がった。TEDxは、2009年から始まったTEDのフランチャイズ版コミュニティで、世界各国・各都市で開催されている。TEDxUTokyoは、東大版TEDとして2012年より始まった。今回、GCLは公式パートナーとして開催に協力した。

今回のTEDxUTokyoのテーマは「en- The Great Wonder」。「en-」には、漢字の「縁」と、名刺を動詞化させる英語の接頭辞「en」という2つの意味が込められている。「人と人が出会いつながる」「このイベントを通して、人と人が交流する／このイベントをきっかけに、ものごとが動き出す」といった目的のもと、「Wonder（大いなる不思議と驚き）」を体感できるよう、プログラムが設計された。スピーカーは下記の通り。



| | |
|-------|--------------------|
| 武田 裕熙 | 口笛奏者 |
| 海法 圭 | 建築家 |
| 加藤 大直 | デザイナー |
| 平野 正雄 | グローバルビジネス研究者 / 実業家 |
| 白雪 純子 | ソーシャルイノベーター |
| 星野 雄三 | マッスル |
| 黒田 玲子 | 化学者 |
| 目崎 雅昭 | 国際文化アナリスト |
| 武藤 真祐 | 医師・社会起業家 |
| 小野 裕史 | マラソンジャンキー |
| 三谷 博 | 歴史家 |
| 石坂 典子 | 産業廃棄物再生業 経営者 |
| 斎藤 馨 | 森林・サウンドスケープ研究者 |
| 白坂 成功 | システムアーキテクト |

プレゼンテーションの形式は極めて多様だった。武田裕熙氏は口笛演奏を披露し、星野雄三氏は自ら肉体を使ったプレゼンテーションを行った。内容も、サウンドスケープ、歴史学、ゴミ問題、高齢化社会など多岐にわたり、新しい考え方が数多く提示された。当日の様子は、動画によっても公開される予定。



昼休みには、自らのアイデアを展示するスペースが設けられた。



別室会場では、誰でも参加できるワークショップも開催された。



武田裕熙氏



白雪純子氏



小野裕史氏



海法圭氏



星野雄三氏



三谷博氏



加藤大直氏



黒田玲子氏



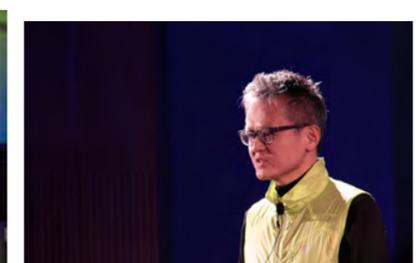
石坂典子氏



平野正雄氏



目崎雅昭氏



斎藤馨氏



武藤真祐氏



白坂成功氏

(※写真はすべて TED x UTokyo 運営本部の提供)
(※この記事は、東京大学新聞との共同企画です)

■ イベント告知

◆ 2015/2/27 (R2P) Global Design Lecture & Seminar : 高齢者と看護 & NTT 研究所における新たなステージに向けた研究活動の紹介

● (R2P) Global Design Lecture : 「高齢者と看護」

● (R2P) Global Design Seminar : 「NTT 研究所における新たなステージに向けた研究活動の紹介」

<プログラム>

(R2P) Global Design Lecture ———

日時：2015年2月27日(金) 14:50～16:20

場所：工学部2号館3階 電気系会議室 1AB

タイトル：高齢者と看護

講演者：山本則子(大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 教授)

概要：

「看護師さん」は誰にとっても身近な職業名と思われるが、一方、看護ほど、その知名度のわりに中身の知られていない職業も少ないように思う。それは多くの人が健康に不自由なく日々を暮しているということを意味しているようでもあり、それはそれで幸せなことだ。しかし社会にこれほど高齢者が増え、慢性疾患を抱えて長く生活する人が増加した今、看護という職業についてもう少し知ることを通して、看護師の支えとともに生活している人々の暮らしに思いを馳せることも、重要であるように思う。

老年期は特に、看護師との接点の多い時期である。加齢とともに心身の不調が発生し、何らかの支援を受けながら生活する人が増えてゆくのは、生物としての人間の自然の流れだと思う。加齢と戦いそれに抗う方法を考えるよりも、変化する心身と向き合いながら、最後の日まで、不快な症状を最小限に抑え、不自由なく自分の心身を生きること、それをすべての高齢者に実現することが、老年看護学の目標である。事例を交えながら、このような老年看護の実践と、その受け手である高齢者の暮らしについて考えたい。

(R2P) Global Design Seminar ———

日時：2015年2月27日(金) 16:40～18:10

場所：工学部2号館3階 電気系会議室 1AB

タイトル：NTT 研究所における新たなステージに向けた研究活動の紹介

講演者：

・コミュニケーション科学基礎研究所 原田登

・ソフトイノベーションセンタ 飯田恭弘

・セキュアプラットフォーム研究所 神谷和憲

・コミュニケーション科学基礎研究所 杉山弘晃

概要：

NTT グループは、新たなステージを目指して、「クラウドサービスの強化」と「グローバル展開の加速」に取り組んでいます。NTT 研究所では、クラウド移行支援技術やセキュリティマネジメント技術など、付加価値の高い技術を磨き上げ、クラウドビジネスの差異化を図っています。今回の講演では、以下の3つの研究テーマを紹介します。

(1) グラフマイニング技術を用いたクラスタ分析、重要度分析 (PageRank)

(2) 機械学習による NW セキュリティのログ分析

(3) 翻訳・対話を担う自然言語処理と「東ロボ」プロジェクト

問い合わせ先：GCL プロジェクトインキュベーション機構 (pim@gcl.i.u-tokyo.ac.jp)

編集・発行：GCL 広報企画

(森友亮 (情報理工 D1), 荒川拓 (学際情報学府 M2), 渋谷遊野 (学際情報学府 M1), 柴山翔二郎 (工 B4), 曾我遼 (工 B4))

発行責任者：木戸冬子 (特任助教)

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 3 号館 235 号室 GCL ラボ

E-mail : pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp